

虹の架橋

今月の題字

片山翔平さん

(㈱いろという代表取締役)

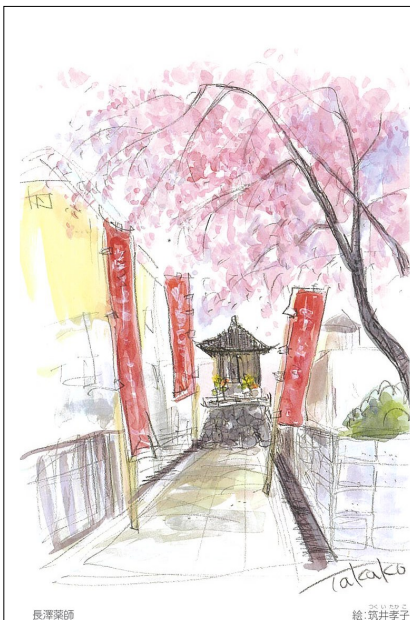
大間々町の中心地区で、空き家をリノベーションして地域文化の発信と交流を目指す活動が始まりました。町の未来を創ろうとする若い人たちの熱い思いが伝わってきます。

虹の架橋

検索で、インターネットからでもご覧いただけます。

長澤薬師『目の字奉納』

枝垂桜が目印の大間々町四丁目まま通り(木戸商店隣)で長澤薬師『目の字奉納』を開催致します。長澤薬師は、今から四百三十年前に大間々町を開いた「草分け六人衆」の家柄の長澤家が代々守り続けてきた薬師様で『目』の字を九つ書いて奉納すると眼病にご利益があると伝えられてきました。「三方良し」の会では、地域の伝統文化でもある「目の字奉納」を次の世代に伝えるために今年も、六人衆とご縁の深い光榮寺様に祈



長澤薬師 絵 坂井孝子

長澤薬師『目の字奉納』
4月7日・4丁目まま通り長澤薬師
9時 目の字奉納(甘酒進呈)
9時半 目の字祈願
10時半 大間々六人衆歴史巡り
「大間々六人衆歴史巡り」は予約が必要です。お申込み、お問合せは…090-2324-5795松崎まで

持をお願いして参加者の健康祈願を行います。また、十時半からは『大間々六人衆歴史巡り』と題して、高草木家、大塚家などを巡り、江戸時代に建てられた高草木家の土蔵の内部に保存されている『お宝見学』なども予定しています。大間々町の歴史や文化に触れることでこの町への愛着や誇りを感じてもらいたいと思います。



毎年恒例の目の字奉納



小耳にはさんだ

いい話 (文責・菊) 《344》

今から百二十九年前の一八九五年、大間々の歴史に残る大火災が発生しました。その時の様子が岡直三郎商店の文書蔵に保存されていた「大火災の顛末書」に克明に記されています。

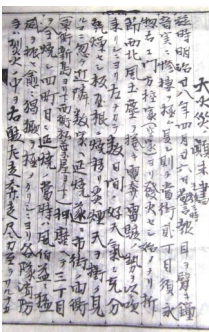
「四月二十六日午後三時、警報が耳をつらぬき、鐘の音がけたましく鳴り響いた。二丁目の空家から出火した火災は、またたく間に町の東街、西街を経て三丁目を全焼し、四丁目にまで広がった。この頃には風が益々

大火災の顛末書

猛威をふるい、猖獗(しょうけつ)・荒れ狂(あはれくる)を極めていた。各隊の消防手は烈火の中を右に左に奔走したが周囲を烈火に取り囲まれ四方八面に逃走せざるを得ない有様であった。ことに水源が乏しかったため、隊の防御は全く機能しなくなり、遂に当店の板塀に飛び火し材木小屋へと延焼した。この危険の折、水源が渇乏する時に及び、当店蔵人は煮込七十二石、二番醤油十二石三石ほどを使用して消火にあたり、その効あつてようやく火は鎮まった」

瓶に換算すると八千五百本分にも相当します。大間々町誌の記録では「この火災で焼失した家は二百七十三戸、土蔵二十三棟、町役場、警察署、銀行、小学校などを焼失させ、群馬県の火災史上に残るものとなった」と書かれています。岡商店は、天明七年に大間々で醸造業を始めた近江商人です。近江商人は「売り手よし、買い手よし、世間よし」の『三方よし』の精神を守り続け、この時の大火災でも「世間よし」のために商品の醤油を消火のために

使った。火災後には「当店より金五十円を罹災者救助義捐金として篤志出金し、焼け出された家には個別に見舞をした」と顛末書に記されています。岡商店には近所の人に使ってもらうための『三方よし』の精神が、あります。水に困った大火災の時の教訓から掘られたのかもしれない。



大火災の顛末書

握る手に小さき菜の花下校の子
通学路のあちこちに菜の花が一面に咲いていてランドセルを背負った女の子の手に黄色い菜の花が握られていました。昔と違って今は子どもの数が少なくなり、外で遊ぶ子供の姿も聞こえなくなりました。下校時にランドセルの子供たちの姿を見ると、うちの孫と友だちだろうかなどと親しみを感じてしまいます。菜の花の花言葉は、快活な愛、小さな幸せ、豊かさ、明るさ、予期せぬ出会いなどだそうです。菜の花を握って家路に向かう女の子を見ていると、どの花言葉もピッタリ合っているようでした。



世界一小さな 定利屋 トイレ美術館

今月の水彩画《344》

大野勝彦さん『誕生日』



自分の誕生日が近づくと、大野勝彦さんの「誕生日」という詩画作品を思い出します。「誕生日はそつと自分にありがとうを言う日です。そして、父さん母さんに感謝する大切な日です」大野さんは農業機械で両手を切断して以来、義手で感動的な詩画を描いています。大野さんはエッセイで「両手を切って、自分では何一つできなくなった時に初めて家族や周囲の人に心の手を合わせた」と書いています。暁鳥敏師は「十億の人に十億の母あるも我が母に勝る母ありなんや」と教えてくれてあります。歳を重ねるほど母への感謝が深まります。

靖ちゃん日記

令和六年三月五日(火)
今回が三十回目のジョイ会に参加した。中国人の女医(ジョイ)徐桂琴先生とワシントン大学の故若林茂先生を中心に、御殿場の「時之栖」で教員で始めた勉強会だった。今回は二十三人が集まった。徐先生は、「嬉しい」と中国語の「我來壽」(ワォーライシウ)は似た発音。いつも嬉しいと言っていると身心も健康になります」と教えてくれた。人生をエンジョイしているジョイ会の仲間はず、嬉しもうる顔をしている。「時之栖」の庄司社長が「靖ちゃん日記の下ネタを詠むと嬉しくなる」と言っていた。熊本の「大野さん」も「靖ちゃん日記」のけがれのない下ネタは「国宝級」と言ってくれた。徐先生は「今はマスクをするため炭酸ガスが肋骨の下にたまっている。ライラする人が多い。白いネクタイを煮込んで食べる」と効く」と言っていた。仁田も下ネタも体によく効く。

